

特集 special

三楽荘の活用策を考える

東城町の老舗旅館「三楽荘」が廃業を決めました。「三楽荘」は、文化財としての価値も高く、城下町東城のシンボリック的存在。廃業により建物自体の存続が危ぶまれる中、かけがえのない地域資源を失ってはいけないと、市は「三楽荘」の保存を決めました。活用方法について市は、当面現状を保存維持しながら、市民の皆さんとの協議を進めたいと考えています。「三楽荘」の活用について、皆さんも一緒に考えてみてください。



春と秋のイベントに一般公開される三楽荘



伝統行事「お通り」でにぎわう三楽荘前



「三楽荘」保存の経緯

東城の顔として愛される

明 治中期から大正に建てられた町家が数多く残る東城のまちなみ。その中でも三楽荘は、中心市街地の角地に立地し、大壁2階建ての重厚さから「東城市街地のシンボル」として、長年、地域住民に親しまれてきました。

しかし、文化財としての価値が浸透してきたのは最近のこと。平成19年に広島大学の三浦正幸教授による調査で明らかになりました。三浦教授は「近代の大規模町家で、高価な用材を多用し、仕上げもすばらしい。近代の地方大工を研究する上で、文化的な価値が高い」と評しています。

また、城下町のまちなみを地域資源として、東城市街地になぎわいを取り戻そうと、平成17年秋から始まった「まちなみぶらり散歩ギャラリー」と「まちなみ春まつり」では、三楽荘が一般開放され、多くの観光客が建物のすばらしさを実感しました。

市民の貴重な財産へ

三 楽荘は明治24年に建てられ、もともと酒造・醤油業を営んでいた

ましたが、昭和24年に旅館業に転じました。しかし、かつての華やかな旅館業は、時代の流れとともに宿泊客がなくなり、建物の補修にも支障をきたしてきました。

数年前からは、長年の風雨により屋根瓦や外壁などの痛みが激しく、老朽化が進み、早期の修復が必要な状況になっていきます。

貴重な建造物を失うことは市の損失。市が保存修復に向けた対策を講じることが、東城地域の振興と市街地の活性化につながると考え、三楽荘の購入を所有者に相談しました。

所有者は「後継者もなく将来的な維持は困難だと考えており、大変ありがたい話。自分では補修できないし、先祖から受け継いだ建物がなくなるのは避けたい。民間へ譲渡するよりも、できれば市で保存活用してほしい。建物は市へ寄附し、土地は市で購入してもらえれば」と思いを伝えました。

所有者の意向に基づき、建物は寄贈を受け、国の「地域活性化・生活対策臨時交付金」で土地1686平方メートルを購入することを決め、補正予算に4600万円を計上しました。

江角忠也副市長は「今後の市街地整備を含めた活性化策を考えたとき、歴史的なまちなみに与える三楽荘のイ

ンパクトは非常に大きく、シンボリックな建造物として重要な役割を果たしている。国の交付金がある今を失うと保存は困難。文化的にも高い貴重な建造物を後世に引き継ぎ、市の活性化に役立てたい」と保存理由を説明しています。

思わぬ反響、地域住民動く

三 楽荘の廃業がマスコミに大きく取り上げられたこともあり、今年の「まちなみ春まつり」は昨年の3500人を大きく上回る約2万人が訪れました。三楽荘には、多いときで一日約1000人が詰めかけたほか、宿泊の予約も殺到しました。

市民には「建物がなくなると寂しい」との声がある一方で、民間施設への公金投入を疑問視する声もあり、市長選挙の争点の一つとしてマスコミに取り上げられました。

三楽荘の保存に危機感を持った住民たちは「三楽荘を保存する会」を結成。まちなみ春まつりに訪れた観光客を中心に、三楽荘の保存と活用を求め署名運動を始めました。

5月14日には、「三楽荘を保存する会」が滝口季彦市長に、1540人分の署名を提出しました。安川保会長は「三楽荘がなくなると、東城のまちなみが死んでしまう。地元自治振興区としても検討会を開き、地域振興に役立つ活用方法を取りまとめ、市へ提言し

ていきたい」と話しています。

また、三楽荘で結婚式を挙げたという高瀬澄雄さんは「思い出のいっぱい詰まった場所。地域住民の思いを届けようと署名活動を始め、市民をはじめ県内外の多くの人に「がんばって」と勇気づけられた。地元住民の中には、三楽荘の保存を行政まかせにせず、秋のギャラリーでは「募金」を始めようとか、庭の草取りや風通しぐらいは自分たちでしようなどの声も出ています。地域の貴重な文化遺産として守っていきたい」と熱い思いを寄せています。

民間施設から市の施設へ。市民の貴重な共有財産として、有効活用が期待されています。



安川会長が滝口市長へ1540人分の署名を手渡す



離れ2階 床・床脇



屋久杉の1枚板を透かし彫りした欄間



庭園



高価な材料を多用した母屋

「三楽荘」の価値を知る

【インタビュー】

現代において二度と建築することはできない大邸宅 県内ナンバーワンの価値

三 楽荘は、建築材料そして建築技術が最も優れた広島県随一の民家と言えます。

建築材料は、驚くほど高価なものを使用しています。土間の梁は、一般的にマツを使用することが多いのですが、三楽荘は贅沢にもヒノキを使用し、しかも磨き丸太で光沢を出しています。これは前代未聞、日本で唯一です。国宝の姫路城天守閣でも、そんな贅沢はしていません。そして、銘木「屋久杉」を母屋の座敷などに使用しています。「屋久杉」は今や世界自然遺産で伐採

することができません。もう一つの特徴は、創作力のすばらしさ。各部のデザインにおいて、当時の最先端の技術、創作力を取り入れている点です。大広間の鴨居の上に水平に打ちつけた長押は、一本材を加工した二重仕上げで、日本で唯一です。縁は、角をスプーンですくったように削った「さじ面」仕上げで、ヨーロッパからの輸入家具をモチーフとした、非常にモダンな細工が施されています。三楽荘は、横山林太郎という大工によって建てられていますが、間違いなく広島県一の大工だったと思います。

世の中から大邸宅が消える？

明 治から大正時代にかけては、日本の長い歴史の中で、最も大工技術が優れ、最も価値の高い建物が建てられた時期。その優れた技術を発揮できる場所が大邸宅でした。

現在、個人で維持修繕ができない、代替わりして相続税が払えないなどの理由で、大邸宅の保存が困難になってきています。それも最も良い建物から取り壊され、さら地にして販売されている状況です。このままいくと、大邸宅が世の中から消えてしまうことになります。

これに危機感を持った自治体だけが立ち上がって、今回の庄原市のように大邸宅を保存しています。結局、大邸宅を保存する方法は、行政が買うしかないというのが現状です。三楽荘を保存しなければ、庄原市が全国に冠たる文化レベルを誇り、広島県で最も立派な建物が建つほど栄えたという証拠を失ってしまうことになりません。

一方で、保存するからには、有効活用を考えなければいけません。一般公開して、観光拠点にすることも良いですが、それだけではもったいないので、やはり地元の方に活用策を考えてもらわないといけません。例えば、お茶やお花など文化活動の場、学習体験の場、研修会の場、コミュニティセンターなど、さまざまな活用を組み合せる

三楽荘は郷土の誇り

文 化財に対する投資は非常に大事です。自分たちの郷土にいい物があると、郷土に対する愛着が生まれ、ここに住んでいる自分たちにも自信が持てるようになります。観光客が増えるなど、直接的な経済効果も期待できますが、それ以上にお金に換算できない効果があると思います。

三楽荘は建築材料の入手や搬入などを考えると、現代において二度と建築することはできません。広島県随一の建物が庄原市にあるという誇りを大切にして、これからは市民の財産だと思っ、有効に保存・活用を考えてほしいと思います。



離れ2階の手すり付きの縁側



ヒノキを使用した梁

広島大学大学院
文学研究科教授

三浦 正幸さん

昭和29年愛知県生まれ。昭和52年東京大学工学部建築学科卒業。平成13年から現職。日本の古建築(神社・寺院・城・民家・近代建築)に関する文化財学で、全国でも数少ない文理科横断的研究を推進する。また、全国各地を实地調査し、文化財建造物の保存活用の研究を行うほか、広島市や尾道市などの文化財審議会等委員など多数兼任する。





おしろ たかし 大石 義一

昭和18年大阪生まれ。現在、京都造形芸術大学環境デザイン学科教授。(株)京都デザインハウス取締役。(社)京都デザイン協会副理事長。軸足を建築に置きながら都市の問題、地域の問題に触れつつ、設計を手掛けている。

まちなみに泊まりたいと思わせる仕掛けを

京都造形芸術大学 教授 大石義一さん

東城のまちなかの魅力は、古い立派なまちなみが現存しながら、なおかつ生きて活躍していること。その中心にあるのが、三楽荘です。旧街道の交差点にあり、どこからでもよく見える場所にあること、そのたたずまいは、シンボル化しやすく、とても魅力があります。これは、東城町のものだけでなく、日本人のものです。市外に住んでいる私たちも残してほしいと思



こんどう ひさこ 近藤 久子

昭和23年東城町川東生まれ。東城高校卒業。旧東城町議会議員8年。庄原市自治振興区活動促進補助金審査委員。東城まちなみ保存振興会副会長など多数委員として活動。

イベントや地域利用など年間を通じた活用を

東城まちなみ保存振興会 副会長 近藤 久子さん

「城下町のまちなみ」をキーワードに、春と秋にイベントを始めて4年。「ギャラリー」に約4万人、「春まつり」に約2万人の観光客が訪れています。その中で、「三楽荘」の存在がいかに大きいか気が付きました。やはりメインはここだと。観光客が玄関を入ると、「えー」とか「おー」というどよめきが聞こえてきます。「こんな山の中に、なんでこんな立派な建物があるの？」と

「三楽荘」を地域振興に活かす

驚く様子は、地元住民にとってかなり痛快でうれしく感じます。

これから、三楽荘をうまくPRしていけば、町家として歴史的価値のある建物なので、伝統芸能の継承の場であったり、地域の人たちがアイデアを活かし気軽に利用できる場だったり、年間を通じていろんな活用ができると思います。

また、まちなかの他の魅力もPRして、三楽荘を中心にまちなか全体が活性化することを期待しています。



ギャラリーでにぎわう三楽荘

ました。そのために、必要なことがあれば、全国へ呼びかけたいと思います。

一方で、まちなみの魅力が十分に生かされていないと感じました。今回、私がデザインした「東城市街地まちなか拠点施設」は、地元の若者がこの町にいたいと思う場所、その拠点にしたいと思えました。そのため観光客にも来てほしいし、いろんな情報が入るし、僕らのやることはたくさんあると思える場面を作りたかった。町のエネルギーは人です。もちろん高齢者や主婦の方にも活用してほしいのですが、若者がここで育つて、ここでがんばってくれないと町の活気は失われていきます。ここを拠点にして外に向かうエネルギーが出てくることを期待しています。若者の活躍がまちなみの魅力を生かすのです。

三楽荘の活用方法としては、まず宿泊です。観光で大切なことは泊まること。私たちも少し立ち寄つただけのところは記憶に残りません。泊まるとその日の夜が寂しかったとか、宿を出たところの飲み屋さんがおもしろかったとか、そういう町を知るためには宿泊は欠かせません。今後は、三楽荘に行つて泊まってみたくらいと思わせることが大事で、そのためには拠点施設が重要になってきます。そこに行ったら朝市をしている、ご飯の後のおいしいプリンが食べられる、町の人と交流できるなど、まちをぶらぶらできる場所

歴史をひもとき まちなかの魅力づくり

庄原市文化財保護審議会 委員 高柴順紀さん

過去の遺産を次の世代にどうつないでいくのか、今生きている私たちの責任です。三楽荘は今でも十分に価値ある建物なので、将来的にはさらに価値が高まると予想しています。

三楽荘のほかに、東城のまちなかには、横山太郎という大工が建てた民家が10数軒あり、どれも立派な建物です。高齢者に聞き取り調査をするなど、横山太郎の歴史や当時の様子をひもとくと、さらにまちなかの魅力が高まると思います。

三楽荘は工夫しだいで維持管理費は抑えられると思いますが、そのためにも旅館業を続けて儲ける施設として活用してほしいと思います。採算ラインは分かりませんが、せつかく宿泊する設備があるので、週末や期間限定なら、継続できるのではないのでしょうか。

というのが東城のまちなかに必要だと思えます。

また、インフォメーションや土産物売り場は、1カ所あればいいというものではないと思います。観光地にはこういう機能がしつこいぐらいないと、観光客はほしい情報を手でできないし、買

あなたの「意見」を聞かせてください

三楽荘の活用方法、そして東城市街地の活性化を市民の皆さんと一緒に考えていくため、シンポジウム「歴史・文化を活かしたまちづくり」を開催します。シンポジウムでは、「東城の町並みとこれから」と題して、学識経験者による講演やパネルディスカッションを行います。町並みの魅力に触れながら、今後のまちづくりについて一緒に考えてみませんか。

内容 「東城の町並みとこれから」
【町屋建造物「三楽荘」調査報告】 梶立広島大学名誉教授 野原建一
京都造形芸術大学教授 大石義一
【町並みから見た東城の力】 野原建一(梶立広島大学名誉教授) 大石義一(京都造形芸術大学教授) 坪井高義(株総合広告社代表取締役専務)
安川 保(上町自治振興区会長) 近藤久子(東城まちなみ保存振興会副会長) 江角忠也(庄原市役所副市長) 問い合わせ
東城支所地域振興室商工観光係
08477-215003
〒729-5121
庄原市東城町川東1175

シンポジウム「歴史・文化を活かしたまちづくり」

とき 6月22日(月) 13時30分〜15時
ところ 旅館「三楽荘」

たかしば としのり 高柴 順紀

昭和18年東城町森生まれ。鳥取大学農学部卒業後、菊作り。平成17年から庄原市文化財保護審議会委員。



い物も十分にできません。三楽荘と拠点施設はお互いに欠かすことができません。他の観光スポットとも連携・協力しながら、地域が活性化することを期待しています。